

ゆうかり放送委員会提供  
**ゆうかりに乾杯**

第 141 回放送の概要 (2019 年 1 月 26 日放)

**パーソナリティ**  
たろう  
(佃 由晃)  
なか  
(中嶋邦弘)  
かりん  
(妹尾優香)  
くらら  
(河野真紀)



**ミキサー**  
門ちゃん  
(門田成延)  
**会計**  
小山俊則  
**相談役**  
わだかん  
(和田幹司)

**1. ゲストコーナー (1) 神戸常盤大学 保健科学部看護学科 准教授 黒野利佐子さん**

黒野先生は、神戸に生まれ滋賀に移り、京都の短大で看護の勉強をし、卒業後神戸海星病院に勤めた。海星病院を選んだのは、元々英語に興味があり、しゃべれるようになりたいという夢を学校で語っていると、カトリックの外国人利用が多い病院があるとと言われてすぐに決めた。

海星病院では産婦人科に配属になったが、小学校の時から子供を産まない結婚しないと宣言していたので、母性は全然関係ないと思っていた。最初は嫌であったが外国人が多く来るおめでたいところで、関われば関わって自分が勉強すればするほど色々な保健指導ができた。英語を勉強するという目的であったが、やっていくうちに英語はそのものを勉強するのではなく、何かをするための道具であることに気づき、母子保健を勉強することが日本人の患者にも喜ばれ楽しかった。当時の英語力は聞き取りも話す方も相当下手だったが、興味があったので聞き取



海星病院産婦人科

ろうとし、わかってもらおうとし、書いたものを見せて身振り手振りを入れて熱心にやっているのと、退院時にはよくかかわった外国人の患者に家に遊びに来ないかと誘われ、拒否することはなかった。病院に應對マニュアルは一応あったが、沐浴、産後のケアなどの冊子は日本人向けであったので、英語だけでも作ろうということで外国人数人と共同で作し、後々の外国人の方の指導に活かされた。

海星病院は元々3年で辞めようとして計画し、英語が上達しなかったのでイギリスに9ヶ月語学留学した。留学前に勉強している時、毎日デイリーという初心者向けの英字新聞のシベリア鉄道の記事を見て興味を持ち、是非シベリア鉄道でユーラシア大陸を横断しドーバー海峡をフェリーで渡って行くという夢を実現したいと思った。当時ゴルバチョフ政権でオープンにしていこうという時で、日本人はウラジオストックから3人シベリア鉄道に乗車し、コンパートメントにはもう一人日本人の女性がおり、その人は東京外国語大学のロシア語を専攻していたので、最初の2日間は通訳をしてくれたので重宝していた。途中下車はモスクワだけで、通訳がいなくなった後はコンパートメント内で身振り手振りのボディランゲージで交流をはかり、結構言葉が通じなくても何とかなるものだと度胸がすわった。ひたすら夏の大草原に巨大なバイカル湖を眺め4泊5日で移動した。



イギリスへ出発時の空港



シベリア鉄道

ロシアについて一番感じたことは、モスクワを見てロシアは非常に貧しい国であることを感じた。物資が不足し、店の前は長蛇の列で並んでいる先を見るとパンやバナナを待っていた。ロシア人はフレンドリーで自国に高いプライドを持っていた。西洋は豊かであっても貧富の差は大きくホームレスがおり、ロシアは家がなくて困っている人はいない。みんな家、仕事があり年寄りになっても安心して暮らしていいことを自慢していた。イギリスではリバプールとウエールズの真ん中あたりのチェスターで、ホームステイ先のランドレディは尼さんを出家した独身で、自分の家は広いからと2部屋を常にホームステイ用にかけていて、一人はウエールズからの高校生、もう一人が黒野さんで楽しく過ごせた。初めのうちはイギリス料理を食べていたが便秘になり自分で日本食を料理していた。イギリス料理は口にはあい美味しいが体に合わなかった。日本料理と交換をしたりした。



コンパートメント内

語学勉強が終わった時看護の勉強をしたいと思い、英国中の看護学校77校に入学願書を提出したが全く返事がなく諦めた。イギリスは植民地から優先的に留学生を受け入れるので、アジア人はよほどのコネがないと入れない。それでバックパッカーで貧乏旅行をして帰ろうと思った。イギリスから始まってヨーロッパ全体とスペインからモロッコに足を延ばした。西ヨーロッパは全部廻り、東ヨーロッパはハンガリ

一、チェコスロバキアを廻った。ベルリンの壁が崩壊した年だったため、バックパッカーの間ではお祭り騒ぎで、東側はフレンドリーなのですぐに民泊させてくれると言われていた。ハンガリーのブタペストではホテル住まいではなく、ホームステイの機会をうかがっていた。夕食をレストランで食べていた時、10人くらいの高齢の男性たちが会食をしていて同席するように誘われた。楽しく食べた後、奥さんも子供も孫もいるこの人の家に行くかと言われ、ホテルをとっていたがついて行った。集合団地の粗末な男の一人所帯で風呂に洗濯ものを干し、入った途端「ビーマイベイビー」と言われびっくりして、護身用に持っていたナイフで手首を切って血を出し、近づいたら死ぬからと言うと、その人もそんなに悪い人ではなかったので離してくれた。その場所に行くのにタクシーに乗っていたので場所がわからず苦労した。

帰国後、違う職業も経験したいと思い看護師をどうしようと思っていた。看護師は自分からなりたいたと思った職業ではなく、高校を卒業する時そのまま卒業すると高卒で給料も見込めない。担任の先生が看護師なら奨学金をもらえるし手に職もつくと言われ、自分で選んだ気がしなかったので違う職業を探してみたいと思っていた。結局迷った末に看護師に戻ろうと思い元の職場海星病院に戻ったが、ユニホームに着替え患者さんと話を始めると、身内からふつつつとやる気と笑顔がこぼれ出てきて、看護師以外の自分は考えられなくなっていたことに気づいた。

阪神大震災発生時はアフリカ旅行中で、同僚から心配だから気をつけてと言われて出て来ていた。帰国直前のロンドンの友人宅にいた時に、友人から驚かないで聞いて神戸に地震が起きたと聞き、TVのニュース映像を見ると生田神社が倒壊し、高速道路からバスが落ちかけておりびっくりした。飛行機が飛ばなかったので2日ほど経って名古屋経由で帰国した。神戸まで帰れなかったため、まず滋賀県の実家に帰り2日後福知山線経由、三宮経由で病院に帰ってきた。街は戦後の爆破されたような風景さながらで、ビルが傾いていたり壊れていた。もっとびっくりしたのは病院に帰る時にバスに乗ると、見知らぬ人たちが水、弁当はどこでもらえる、風呂はどこで入れるなど気さくに話し合っており、普通見知らぬ人同士はしゃべらないのに、震災直後はどこに行ってもみんな気安く色々な情報を交換していた。神田神父が言われている、心の壁がとれて震災ユートピア（震災ユートピア）と言われるちょっと楽しい高揚した雰囲気があった。このように言うと多くの亡くなった方々に申し訳ないが、震災の時に生き生きする、皆で助け合おうとする人の強さ、レジリエンスも同時にみせてもらった。

病院は山の手にあり救急はあまり来なかった。他の病院が大混乱していたことは知らなかった。交通手段が途絶したり、本人やその家族が被災されて、仕事に來れないスタッフがいたので夜勤等が大変だったが、重傷者の受け入れについてはもっと情報が集約され、一極集中でなく患者の分散を図る工夫がされるべき、そのために自分ももっとできたのではと考える。

## 2. ミュージック：津軽三味線奏者 岡田修さんの「白花～雪舞い」

## 3. ゲストコーナー（2）

2回目に海星病院の看護師になろうと思った時これでいこうと思っていた。短大時代はいい加減に看護の勉強をしていたので英語で看護を学びなおそうと思い、アメリカで6年ほどかけて看護学の学位をとり



更に修士までとりに行こうと思って再度経済計画を立て直し、1000万円貯めてからテキサス大学オースティン校に留学した。候補は3校あったがアメリカは住居費が高く、私立は授業料がものすごく高く、その中でもテキサス大学は群を抜いて手ごろな価格だった。留学前に3校を見に行き、テキサス大学は学生5万人で校内を循環バス、郵便局、映画館、プールが3つある広大なキャンパスで迷っていると、学生たちが気軽に声をかけてくれて印象がよかったので決めた。

アメリカでの免許の取り直しが必要で、その勉強はしていたので余裕で達成した。日本では短大だったので政治経済に興味が出てきた。イギリス留学時にゴルバチョフ政権下での国民の暮らし、ベルリンの壁崩壊前にユーラシア大陸横断時（モスクワ→東ドイツ→西ドイツ）、列車で通過しただけで、花が一杯で道路が整備され家も車もきれいな西ドイツの豊かさ、片や影のような東ドイツを比べると2つに政治的に分断されることは凄いことと思い、その後ソ連が崩壊したこと、それまではノンポリであったが政治は国民の生活に大きくかかわっていることに気づき、政治、経済、民族学を勉強（履修と聴講）した。アメリカは世界一豊かというが、ロスアンジェルス的高级住宅街アナハイムは張りぼてで、その裏はインナーシティの貧困地区で、そのような地域はアメリカに沢山ある。オースティンも幹線道路の向こう側はメキシカンの多い、盗難の多い地域で分断されている。片や高級住宅地は車でしか行けない所で、芦屋の六麓荘よりセキュリティが厳しく、囲いの中には登録していない車は入れず、すごく分断されている。大学で初めてアメリカの軍事政策、戦争を少しづつ学び、NO WARという市民運動に入った。911ではツインタワー崩壊の映像が1週間24時間、絶え間なく流され、崩壊した後をグランドゼロと言ってミュージアム化しているが、同じものをアメリカはその破壊的な軍事力で世界中にいくつ戦場を作り出しているのか。何千倍もやっているのではないか。南米・中近東・アジア～世界中でアメリカの軍事が、アメリカに本拠のある超国家企業とタッグを組んで手を伸ばすところはどこも惨憺たる戦禍をなめていたから、アメリカ経済の象徴の貿易センターと軍事の拠点ペンタゴンが狙われたことは大変象徴的な攻撃に思えた。

アメリカの医療については、マイケルムーア監督のドキュメンタリーSiCKOを見るとわかるが、医療保険は民間が殆どで高く、保健なしでは虫垂炎の手術が入院せずに200万円、MRIは撮るだけで数万円、結果を聞くのにコンサルティング費用として5万円など、何をしても高額になる。分度器を当てて関節の可動域を図る簡単なものも50ドル（5千円）かかる。高額のため会社社長でも癌がみつきり抗がん療法をすると、全財産を投げ出さないとアメリカの医療は受けられない。保険料が高額の公的医療扶助制度メディケイドに加入していないとホームレスになる場合がある。加入していない人は当時で600万人いた。

アメリカの投薬については、自分の卒論が精神科の薬の処方仕方、ホームレスの青少年のシェルターに出入りしていた時、シェルターの監視をしていた人から、シェルターに来ている青少年はいろいろあってきているので精神が乱れるのは当然だが、精神科の医師が処方する薬は半端なく多い。薬の副作用が出るとそれに対する薬を処方するので、人により20種類以上を飲んでいる。おかしいと思うので調べてほしいと言われた。120人くらいのカルテをすべて調べ、統計をとると、全く処方されてない半分くらいの青年たちの分も含め一人平均2.7錠処方されていた。鬱、ADHD、統合失調症、反抗挑戦性障害等々、社会的病名が複数ついており、病名自体の科学性もさることながら、こんな若いのにこんなに薬を使うのは異常であった。ADHD自体じっとしてられない多動性、と注意欠陥が主な症状であるが、抗精神薬には、同様の副作用（じっとすわってられない、アカシジアやディスキネシア、デストニア等々）があっ

たり、頭痛やてんかん発作など、どこまでが青年たちが体験している症状が病気によるものか、強い精神薬によるものか疑わしい限りであった。結果をまとめて、ADHD という病気そのもの、その処方にアンフェタミンという中枢神経刺激薬～危険なドラッグ依存になりやすい～を使うことに反対する市民団体 wild colts 野生の若駒（～子供は野生児の揶揄を込めて）の数人とシェルターのヘッドと共に州議会委員に直訴に行った。

現在も鎮痛薬や精神薬の過剰処方が、今アメリカで国民の疫病と呼ばれるほど、多くの方がオーバードーズ死を招いていると話題になっている。2017年一年間だけで72,000人がオーバードーズ死を遂げ、これまでドラッグ依存など無縁であったような市民層も被害にあっている。鎮痛や ADHD に使う薬、アンフェタミンは世界市場の9割以上はアメリカ1国で消費されている。ADHD はもともと子供の病気で、なぜか中枢神経刺激薬なのに子供には、逆説的におとなしくさせる効果があるとして処方されていたが、今や ADHD は大人に対しても診断され、中枢神経刺激薬が堂々と大人にも処方されている。アメリカが精神医学会の重鎮で診断に基づいた治療法を推進しているので、アメリカ発信の治療法が世界に発信されることはとても怖いと思う。ベースには製薬会社と大学研究機関～ヘルスケアビジネスの産学共同体的癒着の構造がある。

治験（承認を得るために行われる臨床試験）について、これは日本も同じで言いたいことは、治験は第三者機関が利権を絡ませず公正に行われていると思われているかもしれないが違う。これは製薬会社が費用を出しているのでお手盛りの治験になる。ダブルブラインドテスト（DBT/二重盲検試験）は、治療している人も、実験している人も誰が薬を使って誰が使っていないか知らないことが前提で行われているかと思っているかもしれないが、結局お金を出しているのは製薬会社だから自分たちに不利な治験結果はださせない。これが凄く問題になっていてアメリカではこうした体制批判を暴露する本も多い。対照実験を装って操作していたという話は沢山ある。日本でもたまにでてくる。大学病院が治験をする場合も製薬会社から研究員が出向していたり、出向者が論文を書いている場合は枚挙にいとまがない。世界でトップの権威のある医学雑誌ランセット（The Lancet）でも暴露されている。日本の水道民営化で所管官庁に水道メジャーが出向しているという話を聞く。

薬を大量に投与することによる副作用について、日本はお薬手帳があり、薬剤師は薬が効かなくならないか、相乗効果になっていないかなどを最低チェックしている。アメリカはお薬手帳はないと思うが、ホームレスの青年たちが20種以上処方されていたのは、日本のように生活保護としてお金を支給するのではなく、現物支給のためそのお金を製薬会社がいかにとるかということで、薬が出し放題になっていることが背景にある。シェルターも現物支給。自分が貧しかった場合を考えるとお金をもらった方が自分でやりくりが出来、貯金して学校に行くことも出来る。サービスとして支給されると依存するしかない構図になる。

アメリカは世界で一番囚人の数が多い。当時200万人超。女性も青少年の囚人数も世界で一番多い。これも家族離散の要因になる。囚人になる要因としてもドラッグの中の貧乏人が買う薬物～クラックは捕まるが、値段の高いコカインの刑罰は軽い。金持ちは保釈金を払って刑期に服さない。

アメリカから帰国すると短大の先生が待っていてくれて京都の短大で3年勤務した。次に神戸常盤大学に変わって今13年になり、4月で足掛け14年目になる。教えているのは基礎看護技術、国際看護、生活健康論。看護学科の学生数は1年生90人程度で4学年で340人余り。基礎看護技術としてはベッドを作り、寝ている患者の体を拭いたり頭を洗ったり、横向けに体位を変えるような実技を演習として習得させる。重症寝たきり患者のケアを最初に学ぶため、自分で動ける患者もベッドに寝かせて体を拭こうとしてしまいやりすぎる場合がある。今後国民の3割が65歳以上になるので、患者を寝かせてケアをして差し上げるのではなく自分で体を拭けるよう、シャワーも風呂も自分で入れるようにするのが本当のケアで、それを教えるべきと思っている。今は在宅ケアが国の方針である。

望ましい看護師像は、解剖学、生理学が学としてではなく、患者の病気と今患者に起きている状態が理解できる知識は絶対必要で、その上で患者の話を聞き生活を整えていくことになるが、帰宅を前提に人間らしい生活は何かを気づいてほしい。病人だから髪の毛やひげがボーボーでもいいと放っておくのではなく、しかし全部看護師がするのではなく、患者と一緒に普通の生活・人間の尊厳を守っていくことが大事。寝たきりのままではなく、少しずつ動いて退院していく時に、自立が難しくても人間らしい状態で帰っていけるにはどうしたらいいかを、常に考えていけるような看護師を育成したい。

神戸常盤大学のネパールとの交流は、医療検査の小野先生とネパールのライ先生が中心になって始めたもので、日本とネパールが交互に行き来している。学生は訪問国のホームステイを体験する。訪問先では病院や学校の見学をしている。交流先をアメリカのような先進国ではなくネパールを選んだのは、昔の日本では電気が点かなかつたり、シャワーが使えなかったりする不便さがあっても、そうではない心の豊かさがあり、学生はそういったところをネパールで体験し、そうした生活の不自由さがあるのに、とても心の豊かな現地の方々に接して感銘し、訪問した学生の中にはネパール fall in Love がやまない学生が後を絶たない。卒業後も同窓会に入り、ネパール交流事業に携わってくれている卒業生も少なくない。



卒業謝恩パーティ（2006年）

長田に来て13年で感じたことは、FMYYに出入りするのここ2年で、それまでは何も知らず、金千秋さんが神戸常盤大学で講師に来ていた時に知り合いになった。こんなに面白いことをしているのに自分たちが知らなかったのはもったいないことをしたと思っている。色んなネットワークを持っており、老若男女問わず色んな人が活躍しており、神田神父の震災の記録を読ませてもらうと本当に共感する。長田の歴史を長田今昔物語～千夜一夜の番組で少し聞いたが、元々外国人が渡来し普通の人たちと交流し、すごくオープンな地域と思うと、今の長田はすごく面白いと思う。神戸市では中央区の次に外国人が多く、ベトナム、中国、韓国も多いことも意外な発見で、昔からその素地があった。そういうところはすごいことと思い、発掘しがいがあり、まだまだこれから学生を絡ませていけたら面白いと思っている。

#### 4. 地域瓦版

こどもフェスタ in 兵庫駅南公園が2月10日(日)10時~16時(雨天時は11日)に開催されます。今回のテーマは「さがせ自分のたからもの」。スタンプラリー、おにごっこ、ダンボールマイハウス作り、木工、やきいも作り、図書館コーナー、まきまきパン作り、滑車ロープ、モンキーブリッジ、外国の遊びなど。遊び道具や材料、楽器など色々用意しています。食べ物のコーナーもあります。いつきてもいつ帰っても遊べます。一部有料のコーナーもあります。

このイベントは4回目で年に2回開催している。兵庫駅南公園は非常に大きく、普段は殆ど活用されておらず、公園を管理する地域団体がなく、こどもフェスタ実行委員会が利用を始めた。イベントでは昔ながらの遊びを用意し、子どもたちが自分たちで考えた企画運営が出来るよう配慮している。



#### 5. エンディング

1月17日は新長田駅前で「KOBEに灯りをin ながた」の追悼式典を行った。特徴は幼稚園、小学校、中学校の生徒さんにろうそくを作ってもらい、その時に震災・防災のお話をしている。行政が表に出てくるのではなく住民主体の取り組みを継続している。



放送音声は、FMYYのHPおよび「ゆうかりに乾杯」のHPで視聴いただけます。

<https://toc117.jp/fmyy/?cat=51>

<http://yukari-ni-kanpai.sakura.ne.jp/>